

紀北地域における実エンドウの夏まき年内どり栽培の播種適期

[研究のねらい]

これまで紀北地域における実エンドウ栽培は、露地秋まき春どり栽培が中心で収穫期間が短く、栽培面積と出荷期間の拡大が望まれてきました。このため、県内の主要品種である「きしゅうすい」と「紀の輝」の露地夏まき年内どり栽培における播種適期を明らかにします。

[研究の成果]

- ①収量は、「紀の輝」、「きしゅうすい」とともに8月9日～12日播種が最も多く、10a当たり700～1,000kgで、この時期より播種が早くても遅くても減収します。上物率は播種時期が遅くなるほど高くなります。本作型の収穫期間は降霜（11月末～12月上旬）までで、収穫は11月が中心となり、播種時期が遅くなるほど収穫開始が遅れ収穫期間が短くなります（図1、表1）
- ②開花時期は播種時期が早いほど早く、「きしゅうすい」より「紀の輝」の方が早くなります。「紀の輝」では初期の花は高温のため落花するので、播種時期に関わらず収穫時期は10月中旬頃からとなります。「きしゅうすい」では落花は少ないですが、播種時期が遅くなるほど収穫時期は遅くなります（表1）。
- ③9月25日頃までに開花した花の多くが落花するため、着莢には最高気温30℃以下、最低気温20℃以下となることが望ましいです（表1）。

[成果の活用面・留意点]

- ①「きしゅうすい」は開花節位の低下を図るため、吸水後種子低温処理(2℃、20日間)を行うか、3～8葉期に16時間日長の長日処理を行います。「紀の輝」では、開花促進処理は不要です。
- ②本作型では、低節位からの分枝が非常に少ないので、種子を10a当たり5～6L(30粒/うね長1m)用意し、莖数確保(25本/畦長1m)に努めます。
- ③本作型では、土壌の昇温防止と乾燥防止のため白黒マルチ被覆とします。また、降雨が少ない場合は灌水チューブで適宜灌水を行います。



写真1 実エンドウ栽培風景

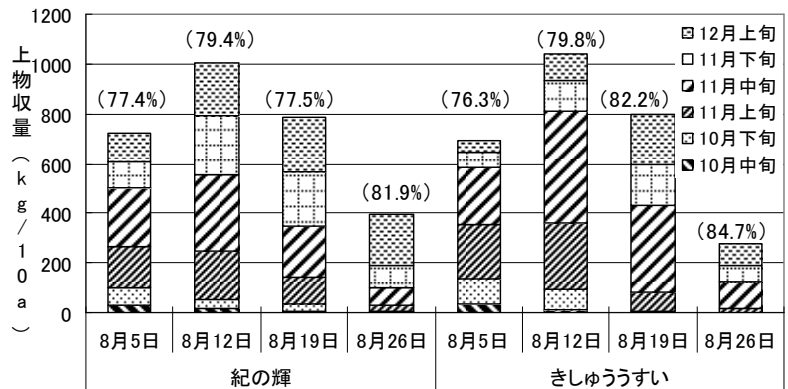


図1 実エンドウの播種時期が時期別の収量と上物率に及ぼす影響(2005年)
注) ()は上物率、上物: 子実粒数4粒以上で著しい欠粒の無い莢
試験地: 紀の川市貴志川町

表1 実エンドウの播種時期が収量および開花始期、収穫始期、落花に及ぼす影響(2005年)

品種	播種日 (月.日)	収量 (kg/10a)	開花始期 (月.日)	収穫始期 (月.日)	開花節位 (節)	着莢節位 (節)
紀の輝	8.5	931	9.5	10.13	12	26
	8.12	1260	9.12	10.13	12	22
	8.19	1022	9.20	10.17	12	21
	8.26	532	9.26	10.17	12	16
きしゅうすい	8.5	898	9.15	10.13	19	22
	8.12	1305	9.23	10.13	19	22
	8.19	981	10.2	10.20	19	20
	8.26	333	10.12	11.4	19	19

注)「きしゅうすい」は吸水後種子低温処理(2℃、20日間)を実施後に播種。

開花節位: 第1花の開花節位、着莢節位: 開花後最初に着莢した節位

施肥量: 基肥N: 5kg/10a、追肥: N2kg/10aを開花始期以降2週間おきに4～5回施肥。

実施年度: 平成16～17年
担当者: 東 卓弥